

# 「可見元朝石刻拓影目録」を編んで

森田 憲司

二〇一九年四月に奈良大学図書館のサイトにあるリポジトリ「可見元朝石刻拓影目録」を改訂増補したが、これを紹介する機会を、『東方』からいただいた。本誌は、中国にかかわる広い範囲の方々に読まれていた。本誌は、中国にかかわる内容について書く前に、なぜ「拓影目録」なのかということ、石刻研究をめぐる状況の基本的なところから書いておきたい。なお、「石刻」という語は中国では石仏のような石に彫られた立体の物も指すが、日本の学界では「石に刻された文字」あるいは「文字の刻された石」を指すのが一般的である。さて、この目録の言う「拓影」とは、石刻の拓本の図版のこと、石刻拓本の図版集から元朝石刻を年代順に表化して、どんな石刻拓影がどの図版集に掲載されているかを検索できるようにしたのがこの表である。リポジトリ改訂時点、対

象文献は二五〇をこえ、石刻一八〇〇点弱を掲載している。ただし、逐次刊行物のものについては、原則採録対象としていない。これは、永田英正―氣賀澤保規―桜井智美と続く、逐刊所載石刻目録の伝統があるので、そちらを参照していただくほうがいいからである。また、近年中国から刊行される石刻書には、録文のみの本も少なくないが、それは一切対象にしていない。拓影と録文では史料としてのあり方の差が大きいと考えているからで、資料集刊行の場合にはぜひ拓影を入れてほしいものだ。一方、拓影がなく写真のみのものについては、文字が読める限りは採録の対象とした。挿図的に小さい拓影や写真が掲げられている場合については、それぞれで判断したが、読める限りは採録した。ただし、年次が石刻上で確認できないものについては、対象から外した。

考えてみれば、中国学、とくに歴史の分野で石刻資料への関心が広がって、三〇年になる。もちろん研究の対象とする時代によって、関心の高い低いはあり、このことは、今は亡き『しにか』の「特集・石で読む中国史」(二〇〇一年三月号)の構成をご覧になると感じていただこう。近世では遼金元時代にかかわる分野で、他の史料が相対的に少ないこともあって、関心が高い。

石刻として残された文字史料の利用は今に始まったことではない。ただし、かつての石刻史料の利用は、清朝や民国時代に収集整理され、録文(文字化)された資料の利用であった。とくに、一九七〇年代の台湾における『石刻資料叢編甲乙』(藝文)や『石刻史料新編』(新文豊)の刊行は、楊殿珣の『石刻跋索引』で存在を知った史部金石類などの石刻書へのアプローチの道を、さらには、石刻関係記事をしぼり含む地方志類の影印もあって、広い範囲の若い世代の研究者に石刻史料利用の道が開かれた。

しかし、くり返すが、それは過去の、つまり清朝や民国期の誰かが「読んで文字にした」史料の中の必要文字データを利用するという限界つきのものであり、きつい言い方をすれば、典籍史料、例えば四庫全書のデータベースを検索して得られるデータと録文を掲載する石刻文献のデータベースを検

索して得られるデータは、いずれもしょせん同じ文字列史料で、石刻について言えば原石での文字史料の様式とは離れているわけで、二つの間に、史料としての性格にどれだけの差があるのかという疑問が残る。石刻はもとの形態から読み解かれねば、その史料価値を失う。

やがて、まず一九八九年から北京図書館(現国家図書館)が『北京図書館所蔵中国歴代石刻拓本資料匯編』一〇〇冊(中州古籍出版社)を出版したのを皮切りに、次々にとくに地域を単位として拓本を影印した資料集が多数刊行された。その状況は現在も進行形で、山西省を対象とする『三晋石刻史料大全』(三晋出版社 二〇〇九)に至っては、巨冊二〇〇冊以上が計画されているという。また、同じころに京都大学人文科学研究所がWEB上で所蔵の拓影を公開し、他にも閲覧を可能とする機関が出てきた。

このようにして、たとえ拓影という形であったとしても、先人の録文ではなくオリジナルな形で石刻の利用を可能とする環境が成立し、石刻を自分で読んで史料として利用することを目指す研究者が多数出現してきた。

もちろん原拓本を所蔵する機関は我が国にも多い。しかし、経験のない方のために申し添えると、拓本はとうぜん原石と同じ大きさであるから、閲覧テーブルに載りきらないものも

名称	名称 根拠	人名	年代	年代 根拠	省	県	所載
少林乳峰仁公禪師（徳仁）塔誌銘	首題	徳仁	至元5年 4月13日	立	河南	登封 少林寺	人文012X、菩提32、 少林碑70、321
乳峯和尚之塔	塔額		至元5年	森田	河南	登封 少林寺	人文186A、 少林碑321
知濟州常若訥謁林廟記	森田		至元6年 11月26日	恭拝	山東	曲阜 孔廟	洪金富056
大元故成都路経略使懐遠大將軍行 軍副万戸劉公（元振）墓誌銘并序	首題	劉元振	至元12年 11月6日	葬	陝西	万年	劉黒馬66(蓋)、67

注記
塔林110には「塔傍・志」とある
全文6字、人文は後至元とするが年代根拠不明、至元3年丙寅卒なので、誌へ付記、塔林110
孔治立石
蓋共

多く、閲覧する際には極めて気を使うし、そもそも折りたたんで保存されていることが一般的な上に、石の寸法に合わせて紙を貼り合わせてあるのが普通だから、拓本を開くだけでも危険がともなう（軸装は軸装で厄介だが）。見せていただく方からしてそうなのだから、見せてくださる機関の方はもっとひやひやされているだろう。閲覧の制限も多いし、何と云っても国内各機関の所蔵する拓本の数には限界がある。その点からも、たとえ図版であっても多数の拓影を見ることができるようになったことは画期的であった。こうした流れについては、『アジア遊学』九一に書いた「石刻熱から二〇年」（二〇〇六）をご参照いただきたい。

その一方で、拓本を影印するには、それなりの大きさや紙質が要求される。拓影が余りに小さかったり、印刷がお粗末で利用に堪えないことを経験された方も多いだろう。となると、書籍は高価な巨冊になりがちで、所蔵できる機関に限界が生じる。当節の図書館では置き場の問題さえ生じる。このことは、たとえば先述の『三晋』の既刊を全冊所蔵する機関を、

したが、リポジトリは三つのファイルからなる。一つは拓影表本文で、あとは凡例と表中に使用した書名の略号表である。

ここでは、再増補作業中の拓影表原稿から四項目を目録のサンプルとして掲げた。以下、それを例としてつつ各項目について説明していきたい。

名称 言うまでもなく、対象石刻の名称であるが、石刻関係文献を利用した経験のある方ならおわかりのように、既存の文献の命名には、書籍における目録規則のような統一された基準というものがない。森田は原典主義を採用して、煩瑣ではある

ONZで検索されればわかる。これに限らず石刻拓影を扱った書籍には、所蔵機関登録が一や二というものが少なくない。これには、ONZが所蔵機関を完全にカバーできていないわけではないという問題もあり、残念かつ困ったことである。

そもそも最初に私が考えたのは、少しでも多くの元朝石刻の拓影を見たいということであった。そのために、文献を集め、他機関の資料を閲覧し、自分のために石刻リストを作成していくうちに、研究者の立場や環境で見ることのできる石刻文献に限界があることへの疑問が生じた。そもそも、どんな文献があつて、それにはどんな石刻拓影が掲載されているのかという情報にすら、アプローチは容易ではないのが現実だった。

こうした時に、京都で開かれている元朝石刻を読む研究会を母体として『13、14世紀東アジア史料通信』という雑誌を私が編集することとし（おかげさまで二四号まで刊行して二〇一七年に休刊）、そこに新刊石刻書情報を掲載したり、勤務先の紀要に今回の目録の試作品を掲載したりしはじめた。これらが、今回の拓影目録の基礎となった。

そろそろ、具体的な目録の内容紹介に入ろう。サイトへのアクセスについては文末でまとめて書くことに

が石刻が用いている名称をそのまま用いている（劉元振墓誌の名称参照）。首題（頭題）↓額の順で用い、いずれもが存在しない場合（意外に多い）には、所載文献の命名、もしくは森田の命名に拠ったが、その場合は表全体での統一性も考慮した。洪金富氏が「常若訥謁林廟題名」と命名したものを「知濟州常若訥謁林廟記」としたのはその例である。こうした事情から所載文献が付している名称と、この表とでは名称が異なる場合もある。命名は分類を前提にするものであり、対象とする石刻をどのようなものとして考えるかという問題をともなう難問である。

名称根拠 上記の命名が何に基づいたかを提示する。人名 個人にかかわる石刻について、検索に便利なように対象人物の名前をフルネームで記した。

年代 対象石刻の年代を示す。一つの石刻に複数の日付がある場合はもっとも新しいものを採用する（後刻の注記などを除く）。同時代（時日？）史料として史料価値が大きい石刻であるが、日付表記は、干支はもとより各種の数字以外のものがあり、面倒な問題をともなう。日付に変換した形に統一して表示しているが、私のミスの可能性もあり、原形をとどめた方がいいかもしれない。また、既存の文献が提示する日付が正しいとは限らず、可能な限り再検討をお

こなっている。上の例では、「乳峯和尚之塔」がそれにあたる。

年代根拠 上記の年次が、立石、建立、埋葬、文書の日付など、どのような日付を採用したものを、原文にできるだけ忠実に表示する。所載文献の注記などでは「\*\*年立」という表現が用いられることが少なくないが、対象とする石刻に対してその年に何がおこなわれたのかを明示することは、同時代性を特性とする石刻という史料にとっては不可欠であると考ええる。

省 県 石刻の所在地を、省と県で表示する。曲阜孔廟や西安碑林、少林寺など、著名な石刻集中地である場合は適宜付記する。

所載 当該拓影を掲載する文献と掲載箇所の略号。上述したように略号表ファイルを追加している。例から一部を紹介すると、「人文」は京大人文研の拓影データベース、「洪金富」は後述する『中央研究院歴史語言研究所藏元代石刻拓本目録』、「少林碑」は『中国少林寺 碑刻卷』（中華書局二〇〇三）などで、『塔林』は少林書局二〇〇七年刊行の本だがCN:になし。

注記 関連資料や写真の存在、欠落場所の存在、年代判定の根拠などなど、利用者に有用と思われる点を記述する。

いのか。石刻史料を利用する研究者がいなければなからう。

最後になったが、上のサンプルでも用いた洪金富氏編の『中央研究院歴史語言研究所藏元代石刻拓本目録』（中央研究院歴史語言研究所）が、二〇一七年一二月に刊行された。八〇〇件をこえる元朝石刻の拓影が公開されており、森田目録に未収のものも多い。かねて交流のある氏から同書の作業の進捗について聞かされ、惠贈も受けていたが、今回の改訂に盛り込むには作業量が大きすぎて、遅延しているうちに、洪氏ご夫妻急逝の報に接した。現在、この大作をも含んだ、表の新たな改訂を進めつつある。また、機会を得て、同書の紹介もおこないたいと考えている。

拓影表へのアプローチは、まず奈良大学図書館のサイト (<http://library.nara-u.ac.jp/>) に入っていたら、以下

奈良大学リポジトリ▽文学部▽教員著書▽森田憲司▽可見元代拓影目録

で、見ていただける。また、同じ場所に『13、14世紀史料通信』の各号も、アップしてある。

（もりた・けんじ 奈良大学名誉教授）

なお、字数の関係で、この文章では各項目の詳細な判定基準、優先順位などについては略したので、「凡例」のファイルを参照していただきたい。また、リポジトリ公開の段階では掲載していないが、エクセルによる配列のために日付をアラビア数字化した作業項目を作成している。さらに、このほかにメモ項目を作成し、再検討の必要や関連文献日付確定のためのメモなど、今後私の検討に必要と思われる点を記録にとどめている。

とりあえずこのようにして目録は完成したが、これからも石刻拓影を掲載した文献は刊行されるから、目録の補綴がたえず必要となる。それが、リポジトリという形式を採用した理由であり、その結果が今春の更新である。今後も改訂をおこなっていく予定でいる。ただし、私は奈良大学を退休したので、新刊の捕捉が不十分になるのが心配であるが。

一方で、私は思うことがある。なぜ、一私学に属する私が、趣味が発端とはいえ、このような目録作成の負担を負わねばならなかったのか。労力のこととはかくとしても、文献収集の財源のうちには、もちろん科研などもあるが学生からの学費も含まれている。このような資料の公開、共有といった仕事は、税金で維持され研究を中心とする機関の仕事ではな